Song Review　1　＃生きているって言ってみろ

『＃生きているって言ってみろ』（友川カズキ：作詞・作曲）を取り上げる。本作は、社会の片隅で生きる人々の苦悩、孤独、怒り、そしてかすかな希望を、鋭くかつ詩的に描いている

この歌を聴いたのは、1978 年の研修医時代である。病理の指導医・冨元一彦氏と一緒に静岡のレコード店のスミヤで聴いた。この歌を二人でリクエストするとそこに居た買い物客がビックリしていたのを鮮明に思い出す。冨元氏に、障害を持った人たちや芸術家、新聞記者、作家、NHK ディレクター、公害運動に立ち上がっている人、南アフリカのアパルトヘイト撤廃を叫ぶ人たちを紹介され、デモに参加し様々な交流を持つことができた（冨元氏は数年後、志を果たすためにアフリカに渡ったが、現地でマラリアに罹患し、命を落とした）。この歌を聴くと、この頃のことを思い出す。
1970 年代の日本は、高度経済成長の終盤にあたり、経済的繁栄と格差の拡大し、カラーテレビ・クーラー・カーの「3C」が象徴する消費文化が広がる一方で、都市部では貧困層や労働者の孤立が深刻化していた。水俣病や四日市ぜんそくなど、産業発展の代償として環境破壊が顕在化し社会問題になった。また、ヒッピー、フーテン、学生運動、パンクロックなど、既存の価値観への反発が文化として表出した。寺山修司や大島渚らの活動もこの流れと共鳴している。このような時代に、友川カズキが登場する。彼の歌は、社会の「表」ではなく「裏」から発せられる声であり、体制に迎合しない孤高の叫びであった。

「ビッショリ汚れた手拭いを、腰にゆわえてトボトボと
死人でもあるまいによ、自分の家の前で立ち止まり
覚悟を決めてドアを押す、地獄でもあるまいによ
生きてるって言ってみろ、生きてるって言ってみろ、生きてるって言ってみろ

淋しさ優しさ苦しさは、この世の切ないメロドラマ
屠殺場でもあるまいによ、ヒッピー・フーテン・乞食の子
嘆きの喜びいじくってよ、廃人でもあるまいによ
生きてるって言ってみろ、生きてるって言ってみろ、生きてるって言ってみろ

夢と現実ぶら下げて、涙と孤独を相棒に
コケシでもあるまいによ、長髪・マンネリ・潔さ
根っこの太さはどこへやら、墓石でもあるまいによ

生きてるって言ってみろ、生きてるって言ってみろ、生きてるって言ってみろ」

この「生きてるって言ってみろ」というリフレインは、聴き手に対して存在の証明を迫るような強烈な問いかけである。まさに、実存の叫びである。歌唱はほとんど絶叫に近いが、聴く者の感情を揺さぶる。

ちあきなおみがこの歌を聴いて、友川カズキに依頼した歌が『夜へ急ぐ人』（友川カズキが作詞・作曲：1977 年）である。歌謡曲の枠を超えた、詩的かつ劇的な世界観が展開され、ちあきの表現力が最大限に発揮された一曲である。

「夜へ急ぐ人が居りゃ、その肩 止める人も居る
黙って 過ぎる人が居りゃ、笑って 見てる人も居る
かんかん照りの昼は怖い、正体あらわす夜も怖い
燃える恋ほど 脆い恋、あたしの心の深い闇の中から
おいで おいで おいでをする人、あんた誰〜

にぎやかな夜の街角で、かなわぬ夢の分かれ幾つ
勇気で終わる恋もありゃ、臆病で始まる恋もある
かんかん照りの昼は怖い、正体あらわす夜も怖い
燃える恋ほど 脆い恋、あたしの心の深い闇の中から
おいで おいで おいでをする人、あんた誰〜」

ちあきなおみの歌唱は「演技」に近く、歌の主人公に完全に憑依するスタイルである。友川カズキは彼女のステージを見て、「完全な壊れ物」と評し、「歌っている感じでもないし、しゃべっている感じでもない」と語っている。1977 年の第 28 回 NHK 紅白歌合戦では、NHK からの「喝采」を歌ってほしいという要望を振り切って『夜へ急ぐ人』を歌ったという。彼女は黒尽くめの衣装に身を包み、髪を振り乱しながら、歌詞の主人公に完全に憑依したように「おいで おいで」とカメラに向かって手招きするという鬼気迫る演出を披露した。その姿は、従来の歌謡曲の枠を超え、まるで舞台演劇の一幕のような迫力を持っており、今でも語り草になっている（YouTube で視聴できる）。
評価：★★★★★